

# 本を 楽しむ

近年、近世期の日本を研究するためのスキルとして「和本リテラシー」の必要性が強調されている。筆者が教鞭をとる英国ケンブリッジ大学イマヌエル・カレッジでは、くずし字・変体仮名にとどまらず、近世書物の書体・文体・媒体を効果的に教える方法を考案した。同学におけるサマー・スクールでの営みを紹介し、海外において「総合的和本リテラシー」を学ぶためのヒントを提示する。

## 「総合的和本リテラシー」教育

### ケンブリッジ大学イマヌエル・カレッジの試み

## ラウラ・モレッティ



英国ケンブリッジ大学東アジア・中東学科学教授。専門は日本近世文学、特に仮名草子、草双紙、小番付を研究する。

海外において古典日本語・古典籍を学ぶことは、程度の違いはあれ、今も昔もハードルがある。筆者の世代が日本以外で変体仮名・くずし字を学ぶ機会を得ることは希有なことであった。しかし、文学のカノンを超えた研究を目指す場合、草書体で書かれた未翻刻の書籍を読む必要がある、日本留学中にその知識を得ることが唯一の方法であった。私の場合は、東京大学の多くの先生方のご指導のもと、学部および大学院のゼミに参加することで変体仮名・くずし字を勉強する機会を得た。また、自分の専門分野である仮名草子の研究を進めるに当り、数多くの未翻刻作品を短期間で読む必要に迫られ、貞享二年刊『竹斎療治之評判』の

研究を進める際には、深沢秋男先生にその資料の翻刻を『近世初期文芸』に掲載するチャンスを与えられた。この翻刻を公開するという精神的なプレッシャーこそが上達するための大きなきつかけとなった。翻刻作成の間にはいろいろな苦労もあった。特に、日本人学習者のための暗記を重視する経験主義的な勉強方法が外国人である私にはそれほど効果的ではなかったことと、翻刻の規則が定まっていなかったこと、翻刻の規則が大なるチャレンジであった。まさしく、いま我々が取り組んでいる「総合的和本リテラシー教育」に直結する課題である。そのとき、近世文学の研究を希望する次世代の学生には同じ苦労をさせた

くないとの思いが芽生え、その後、紆余曲折を経ながらもここで紹介するサマー・スクールへと繋がることとなった。

中野三敏氏によつて最初に唱えられた「和本リテラシー」(「和本教室」(2) 変体仮名のすすめ)、『図書』七一二号、二〇〇八年)は、現在、以下のように解釈されている。「江戸時代末までに書写もしくは刊行された古典籍(和本)をどう読み、理解し、そして活用していくかといった、日本古典籍に関わる総合的な能力を指すものです。と同時に、狭い意味では、いわゆる「くずし字」(変体仮名)の読解能力を指します」(日本近世文学会の広報企画委員会による定義)。

現在、日本国内に限らず世界中の江戸時代の研究者が「和本リテラシー」の大切さを認め、その教育に力を入れるようになった。江戸時代の原本が判読できない限り、結局は翻字された資料のみを読むだけとなり、当時出版された書籍の極一部にしかアクセスできず、近世の文学・思想・歴史などといった分野の研究への知的な貢献も限られてくると認められているからである。近世研究の新しい世代にとっては「和本リテラシー」は不可欠な技能であることは言を俟たない。

英国のケンブリッジ大学イマヌエル・カレッジでは最先端の「和本リテラシー」教育を目指して、二松學舎大学東アジア学術総合研究所との共催により、二〇一四年よりGraduate Summer

School in Japanese Early-modern Palaeography (日本語訳は「総合的和本リテラシーを学ぶサマー・スクール」)を毎年八月の第一週目と第二週目にイマヌエル・カレッジ(Emmanuel College)に於いて開催している【図版①】。いっしょに英文の「Graduate」は大学院生・研究者・美術館のキュレーター・司書を主に対象とすることを意味する。毎年ヨーロッパをはじめ、アメリカ・オーストラリア・日本など世界中からの応募者が三十名を超え、その中からの二十名の参加者をその専門分野を基準に選んでいる。なお、「Palaeography」という言葉は、一般には「古文書学」と訳すが、ここでは以下に定義する「総合的和本リテラシー」に相当する語彙であると理解していただきたい。

「和本リテラシー」には上述したような広い意味があるにもかかわらず、こと欧米では「変体仮名・くずし字」ワークショップという形の、狭い意味で捉えた「和本リテラシー」の教育を意味するのが現状である。そして、多くの場合、日本から研究者を招き、二〜三日程度の短い期間で日本人対象の教育方法にもとづいて行われている。しかし、ケンブリッジ大学イマヌエル・カレッジのサマー・スクールはそれと異なる方法を試みている。なお、サマー・スクールのコンセプトは、長年一緒に仕事させていただいている二松學舎大学東アジア学術総合研究所特命教授山邊進先生とともに考案したものである。

本稿ではこのサマー・スクールの意義、およびその構成と内容について紹介する。

## 「総合的和本リテラシー」とは

江戸時代のテキストを読む際、書体(特に草書体のくずし字・変体仮名)の判読が大切ではある

【図版①】…二〇一六年のサマー・スクールの授業風景。



が、それで全てだとは言えない。なぜならば近世の版本・写本・古文書を解読するに当たって、文

体も当然ながらそれに関わってくるからである。ここでいう文体とは、漢文体・漢文訓読体・候文体などを含み、それらは解読において決して無視することはできない。すなわち書体の判読ができて、対象の文章が書かれている文体の知識がない限り、その文章の内容理解は不可能のままである。和文と漢文（漢文訓読）は長い間別の分野のことであるかのように扱われてきたが、近世の文化・歴史・文学などを研究するに当たって、両者は不可欠かつ不可分なものである。例えば、変体漢文体である候文は江戸時代の共通の書き言葉の一つであり、候文で書かれている資料は歴史家が扱っている古文書に限らず、版本においても板元の広告を初め様々な資料で用いられている文体である。候文の知識がなければ、近世の書物や文化を研究することは困難であろう。

書体と共に文体も学び、その対象は和文・漢文訓読・候文など、江戸時代に行われたすべての文体を含むということが我らのサマー・スクールのコンセプトである。さらにそれに加えて、全ての文章はある媒体によつて伝わるという事実がある。文章はテキストだけではなく、「モノ」でもある。その媒体（モノとしての文章）は版本であるろうが、写本であろうが、巻物・画帖・袋綴じなどの色々な形態をとっており、その形態独自の働

きを十分に把握しないと、文章そのものの理解にも影響されかねない。すなわち、ここに書誌学を学ぶ必要性が生じてくるのである。我々が言う「和本リテラシー」とは書体・文体・媒体を総合的に考えるものであり、これが「総合的和本リテラシー」と定義する所以である。

## 教育方針の柱

本サマー・スクールは七十二時間の教育を提供し、和文体（草書）、漢文および漢文訓読体（楷書）、候文体（草書）の三文体に等分している。この三つの文体をこのように一度に取り上げることが可能なのは、各々のスキルを身に付けている研究者チームの存在による。

漢文および漢文訓読体（楷書）の担当者である山邊進先生は、二松學舎大学 21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」およびその継続事業である同大学の日本漢文教育研究プログラムに於いて、長年にわたり海外の大学院生を対象とした漢文訓読教育に携わってきた。そのため、日本人対象の従来の教育法とは異なつた外国人に馴染みやすい教え方をマスターしているエキスパートである。

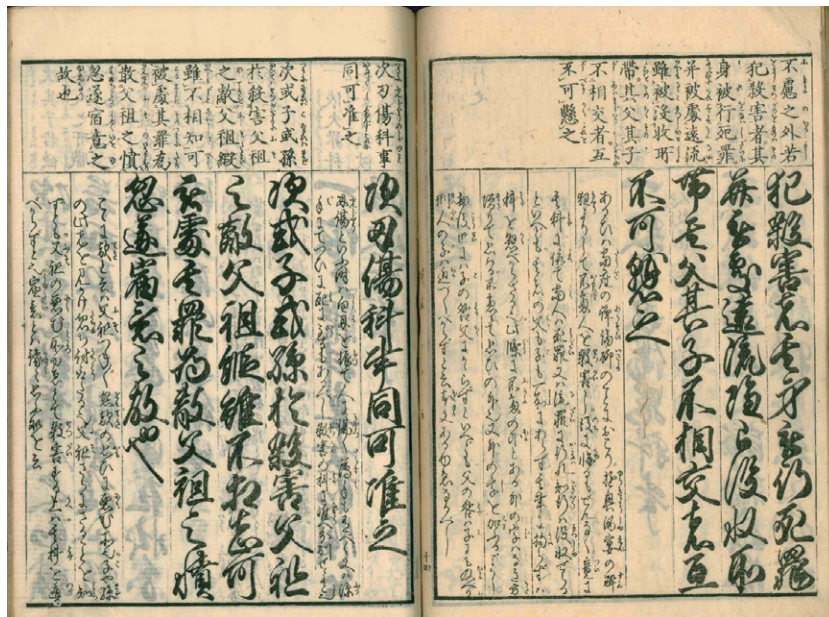
草書で書かれた和文体の担当者は筆者である。草書の候文体の場合には、歴史家若しくは言語学

者をお招きすることになっている。例えば二〇一五年の候文の担当者はアメリカのNorthwestern大学教授 Amy Beth Stanley 先生にお願いした。なお、経済的な余裕がない場合、筆者が候文体の担当者にもなる。

なお、草書の和文体と候文体を教えることにあたっては、以下の点に注意を払っている。

まず、資料の選び方である。多くの場合、一つの資料のみを選択し、その資料を出来るかぎり読み通すという方法が広く行われているかと思う。この方法の利点は学習者に一つの本文を読み切るという満足感を与えることと、その資料に使われている書体に馴染むということだと思われる。しかしその反面、時代によつて且つジャンルによつて書体が大きく変っていくという重要な点を見落とす危険性を伴う方法でもある。そのため、本サマー・スクールでは複数の資料の選択とその資料の多様性を優先させている。より詳しく言うとし、江戸時代の版本の書体をもとに、その無数の版本の中から時期（初期・前期・中期・後期）とその時期の特徴となっているジャンルを（網羅的にはならないが）可能な限り幅広く反映させるという形で資料を選んでいる。写本に見られる個人の書体の癖は勿論、版本の場合にも時代若しくはジャンルによつて書体が変わっており、それぞれの書体を確認し、その書体の表記について論じる事は palaeography という学問の一つの目的でもある。本





【図版②】…和泉屋金右衛門板『登註／御成敗式目』（高井蘭山講釈（英国於 鈴蘭文庫蔵）。二〇一六年のサマー・スクールの資料の一つ）。

サマー・スクールではこのような研究の可能性を  
実感し、それを行うための基礎的な知識を提供す  
ることを意図している。

また、学習者に一つのテキストを読み切る満

First week	9.00-10.30	11.00-12.30	13.30-15.00	15.30-17.00
<b>Mon 1 Aug</b>	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Introduction to the basics 絵本筆津花 and 彼岸桜陽花談義 (寛政十一年) Interactive lecture (LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Introduction to the basics 彼岸桜陽花談義 (寛政十一年) Interactive lecture (LM)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Introduction to Edo-period <i>teradoku</i> Introduction to the basics 漢文訓読の基礎 Interactive lecture (YS)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Introduction to the basics 点例 (貝原益軒) Interactive lecture (YS)
17.00-18.00 Keynote lecture Prof Mickey Adolphson				
<b>Tue 2 Aug</b>	<i>Hentaigensai kuzushiji (wibun)</i> Introduction to the basics 町人書状體 (往來物・手形証文) (ふりがな付) Interactive lecture (LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wibun)</i> Introduction to the basics 今様百人一首番書錦 (往來物・手形証文) (ふりがな付) 女性向け Interactive lecture (LM)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Introduction to the basics 点例 (貝原益軒) Interactive lecture (YS)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Introduction to the basics 点例 (貝原益軒) Group work (YS)
<b>Wed 3 Aug</b>	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 実語教語解 (寛文九年成立) Interactive lecture (YS)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 実語教語解 (寛文九年成立) Interactive lecture and individual work (YS & LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Extracts from 実語教語解 (寛文九年成立) Interactive lecture and individual work (YS & LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Extracts from 実語教語解 (寛文九年成立) Interactive lecture and individual work (YS & LM)
<b>Thu 4 Aug</b>	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 実語教語解 (寛文九年成立) Interactive lecture (YS)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Extracts from 実語教語解 (寛文九年成立) Interactive lecture and individual work (YS & LM)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 蒙求 (岡白駒箋注) Interactive lecture (YS)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wibun)</i> 一星文庫の文書 (等) 拾玉用文宝鑑 (往來物・手形証文) (ふりがな付・参考) Interactive lecture (LM)
<b>Fri 5 Aug</b>	Special-purpose workshop (YA) Writing <i>aisho</i> to better understand how to read cursive	Special-purpose workshop (YA) Writing <i>aisho</i> to better understand how to read cursive	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 蒙求 (岡白駒箋注) Interactive lecture (YS)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wibun)</i> 手引の松 (往來物・手形証文) (ふりがな無) 女性向け Interactive lecture (LM)
17.00-18.00 Keynote lecture Dr Ella Tinios followed by formal dinner at Emmanuel College				
<b>Sat 6 Aug</b>	Special-purpose workshop (YA) Writing <i>aisho</i> to better understand how to read cursive	Special-purpose workshop (YA & LM) Writing <i>aisho</i> to better understand how to read cursive	Special-purpose workshop (YA) Writing <i>aisho</i> to better understand how to read cursive	Special-purpose workshop (YA & LM) Writing <i>aisho</i> to better understand how to read cursive

足感を与えるために、江戸時代に多く刊行された  
短編集の中から一丁・二丁程度の短い文章を選  
び、その内容も物語とともに非物語的な素材も読  
ませている。なお、継続的に参加する学習者もい  
るので、毎年異なる資料を選んでいる。そのため昨

年以来、江戸文学・文化の中からの一つのテーマ  
に絞って、資料を選ぶことにした。二〇一五年の  
テーマは吉原とその文化であり、二〇一六年は近  
世の庶民教育である【図版③】。  
続いて、変体仮名・くずし字を覚えるための

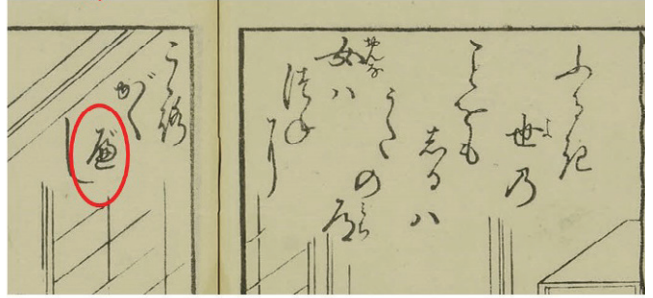
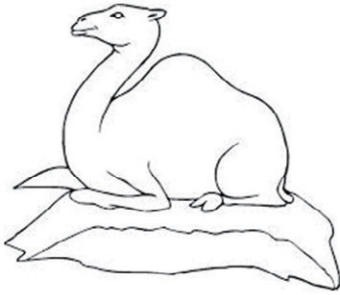
【図版③】…二〇一六年のプログラム。(LM) は筆者、(YS) は山邊進先生、(YA) は恵杏壽昌鶴先生を示す。

Second week	9.00-10.30	11.00-12.30	13.30-15.00	15.30-17.00
<b>Mon 8 Aug</b>	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 千字文 Interactive lecture (YS)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 千字文 Interactive lecture (YS)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Extracts from 本朝千字文 (分海堂版) Individual work (LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Extracts from 本朝千字文 (分海堂版) Individual work (LM)
<b>Tue 9 Aug</b>	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 女論語 (伝家尚宮撰) Interactive lecture (YS)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 女論語 (伝家尚宮撰) Interactive lecture (YS)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Extracts from 女論語 (近世中期) Interactive lecture (LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Extracts from 女論語 (近世中期) Interactive lecture (LM)
<b>Wed 10 Aug</b>	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> 御成敗式目 (和泉屋金右衛門) Interactive lecture (YS&LM)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> 御成敗式目 (和泉屋金右衛門) Interactive lecture (YS&LM)	Hands-on session at the special collection of Edo-period printed materials in the Cambridge University Library	
<b>Thu 11 Aug</b>	<i>Hentaigensai kuzushiji (wibun)</i> 懐徳堂の定書 (等) Individual work (LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wibun)</i> 寺子訓読之書 (等) Individual work (LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wibun)</i> 文吉行作日記帳 (等) Individual work (LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wibun)</i> 文吉行作日記帳 (等) Individual work (LM)
<b>Fri 12 Aug</b>	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 論語示業句解 (中村惕斎) Interactive lecture (YS)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 論語示業句解 (中村惕斎) Interactive lecture (YS)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Extracts from 女玉経 (延宝三年成立) Interactive lecture (LM)	<i>Hentaigensai kuzushiji (wabun)</i> Extracts from 女玉経 (延宝三年成立) Interactive lecture (LM)
<b>Sat 13 Aug</b>	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 論語示業句解 (中村惕斎) Interactive lecture (YS)	<i>Kanbun/kanbun kundoku</i> Extracts from 論語示業句解 (中村惕斎) Interactive lecture (YS)	Hentaigensai kuzushiji (wabun) Game using 文字万代の宝 (路絵)	Hentaigensai kuzushiji (wabun) Game using 文字万代の宝 (路絵)

「図版④」…「辺」をもとにした「へ」という変体仮名とその連想画像。

## Tip for memorizing it

This へ variant looks like a sitting camel



工夫にも取り組んでいる。いままで受けてきた教育の場で「暗記」という行為自体の経験が少なく、欧米人を相手に教える際、ただ単に字をよく見て、その字の形を暗記する方法では効果は期待できない。字母の説明を加えると、その字の形の起源が明確になり、理屈上での文字理解は深まるが、字の形そのものを覚えるにはそれほど役に立たない。

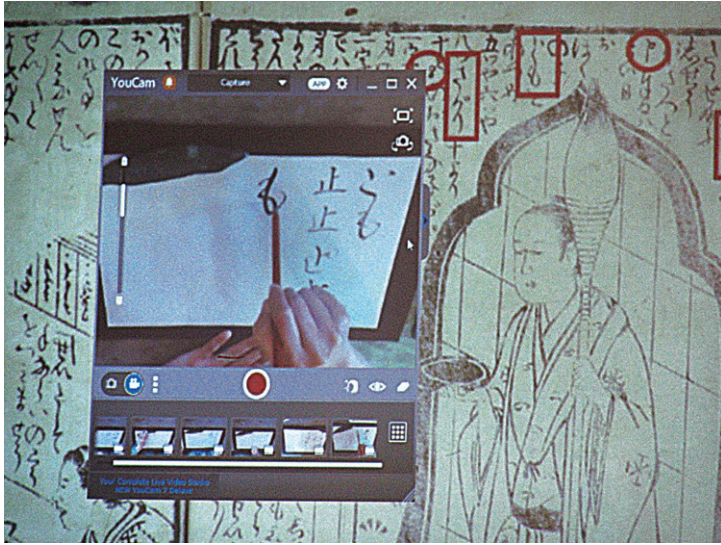
そこで、次の二つの方法を行っている。まず、学習者の反応に基づいて考えた方法として、仮名・漢字の形を印象に残りやすい、馴染みのある画像に連想させ、関連づけるという方法である。例えば、変体仮名入門のテキストとして扱う延享三年刊『絵本筆津花』（英国個人蔵）を読む際、初心者には「辺」をもとにした「へ」は見たことのない字形であった。そこで意外な類似に気付いてもらう。この「へ」は座っているラクダにそっくりだ（図版④）。目から鱗が落ちたような気分の学習者は、その瞬間からこの変体仮名を忘れることはない。また、「耳」からくる「に」はミリアキヤットの姿に類似するとか、「本」からくる「は」は立っている可愛らしいリスに似ているとかといった類似を指摘する。教えれば教えるほど、このような「連想画像」の可能性が生まれ、学習者自身も色々なアイディアを出してくる。冗談のようなだが、いままで利用した方法の中でこれこそが（特に欧米人にとって）一番効果的な方法である。

と確信している。「暗記」という消極的な行為を「連想」という積極的な行為に換えることによって、変体仮名の判読がより簡単になる。

次に、ロンドン在住の仮名を専門とする書道家恵杏壽昌鶴（エアーズ由希子）先生との出会いによって生まれた方法を紹介する。昌鶴先生の方を借りて、二〇一五年より「寺子屋式お稽古」というセッションを行っている。これは江戸時代の一般人と同じように、草書体の字を読むだけでなく、書くこと、言い換えれば、字母から崩され、仮名として使われるようになった形を実際にかきながら覚えるという意図にもとづく。この「寺子屋式お稽古」では、まず、「いろは」の順番に仮名の様々な字形の筆の動きを見せ、学習者にはそれを鉛筆で書く練習をさせる。続いて、いままで読んできたテキストの中から学習者にとって特に判読しにくかったつづけ字を筆で再現する。昌鶴先生の筆の動きをカメラで撮り（図版⑤）、それを読んできたテキスト（早稲田大学図書館所蔵本『彼岸桜勝花談義』）と照らし合わせながら学習者に書かせる。前述の変体仮名に画像を連想させる方法に加えて、字母の崩れ方を認識した上で、その崩された字を自分で書いて覚えることは、外国人にとって大変有益な手段であった。

最後に、本サマー・スクールでは書体・文体の解説の学習のほかに、翻刻を作成するためのトレーニングも提供している。いままで翻刻を公開





【図版④】：恵杏壽昌鶴先生の筆の動き方を見ながら『彼岸桜勝花談義』に出てくるつづけ字を再確認する。

する外国人が意外と少なく、非常に残念に思ってきた。そもそも翻刻を作成するということは、その文章の意味を正確に理解しないかぎり、実現困難な作業である。このことは変体仮名・くずし字の教育にも繋がっていく。すなわち、草書体の文章を正しく判読するには、その意味をしっかりと

理解する必要がある、特によく似ている変体仮名が数多く存在する中で、形の認識だけでその文字を解読するわけにはいかない。「る」「か」「き」「け」「れ」「ち」「ら」などを正確に判読するにはその文章の文脈・意味を考えるしかなく、また、その文脈・意味を正確に理解するためには翻刻作成ほどの有意義な方法はないのである。そこで本サマー・スクールでは、公開可能なレベルの翻刻作成の方法をしっかりと教えている。

また、媒体の大切さを実感するためにいくつかの活動をプログラムに取り入れている。まず、授業に於いては、可能な限り英国の個人所蔵の和本を用いている。原本を手に触れながらその資料を判読し、翻刻する経験の重要性を実感するためである。また、ケンブリッジ大学図書館の古書コレクションを見学し、近世のさまざまな資料を閲覧しながら和本の知識を増やす。最後に、「モノ」としての和本についての基調講演を書誌学の専門家である英国リーズ大学のEllie Trinos先生にお願いし、毎回、和本に関する刺激的な話を伺っている。なお、毎年、春に書誌学に関するワークショップも開催しており、その際には刊記・奥付けの読み方、書誌カードの取り方などを教えている。

## まとめ 今後の課題をめぐって

本稿では「総合的和本リテラシー」を目指すケンブリッジ大学イマヌエル・カレッジのサマー・スクールの簡単な紹介をさせていただいたが、最後に今後の課題について言及したい。

公開された変体仮名のアプリや変体仮名・くずし字を自動的に判読するOCRのソフトが開発されつつあるこの時代に於いて、このようなアナログ式の教育にも意義があることを示す教育方法を考えるべきであろう。また、学習者のレベルの違いをよりうまく処理する必要がある。

そこで、山邊先生と考えていることは、初級漢文訓読と初級変体仮名・くずし字のオンライン・コースによる学習であり、現在はそのために準備を進め、一部分、公開している段階である。オンライン・コースで基礎知識を身に付けた上で、このサマー・スクールに参加するような状況が実現できたならば、二週間での上達はより一層大きなものになるだろう。

最後に、本サマー・スクールの成果が日本語の表記研究にいかに関与することが可能であるか、我々はこのことを今後の課題として共有している。なお、本サマー・スクールにはHPも作っているが、ご関心のある方は是非ご覧いただきたい。

## PDF版

本を楽しむ 「総合的和本リテラシー」教育  
——ケンブリッジ大学イマヌエル・カレッジの試み ラウラ・モレッティ 著  
『書物学 第9巻 江戸の欲望／江戸という欲望』に掲載した論文

---

2016年 10 月 31 日 電子書籍版発行  
配信元 (社)勉誠 <http://e-bookguide.jp> e-mail: [info@e-bookguide.jp](mailto:info@e-bookguide.jp)  
購入時にご承諾いただいた規約の通り、本作品の全部または一部を有償・無償にかかわらず無断で、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載するなど、他者に譲渡することを禁止します。  
著作権尊重と不正コピー防止のために、各ページにご購入者のメールアドレスを記載しています。

---

この電子版は以下書籍からPDF版で部分掲載したものです。

『書物学 第9巻』 2016年10月刊

企画・編集 (社) 勉 誠

発行者 池嶋洋次

発行所 勉誠出版株式会社

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-10-2

TEL : (03)5215-9021 FAX : (03)5215-9025

© Laura Moretti 2016

---